

山古志復興新ビジョン 中間報告（案）

< 資料編 >

目次

資料1．山古志村の被害状況

資料2．アンケート調査結果

資料3．ヒアリング調査結果

資料4．山古志土砂災害危険エリアの検討

資料5．地域資源・復興メモリアルコース検討

平成17年3月7日

資料 1 . 山古志村の被害状況

「山古志復興新ビジョン」の検討にあたり、「中越地震」被災直後の状況を出きるだけ正確に認識する必要があることから、「山古志村被害概況図」として取りまとめたものである。ただし、現在も全村民避難が続いている状況に加え、19年振りともいわれる豪雪に襲われている現状から、被災調査が進んでいない状況にあり、数値については、今後変化することが十分に考えられる。

目次

- 1 . 山古志村 国道 291 号および芋川河道閉塞ほか復旧状況の整理
 - 1.1. 国道 291 号
 - 1.2. 河道閉塞
 - 1.3. その他
- 2 . 山古志村被害概況図

1. 山古志村 国道 291 号および芋川河道閉塞ほか復旧状況の整理

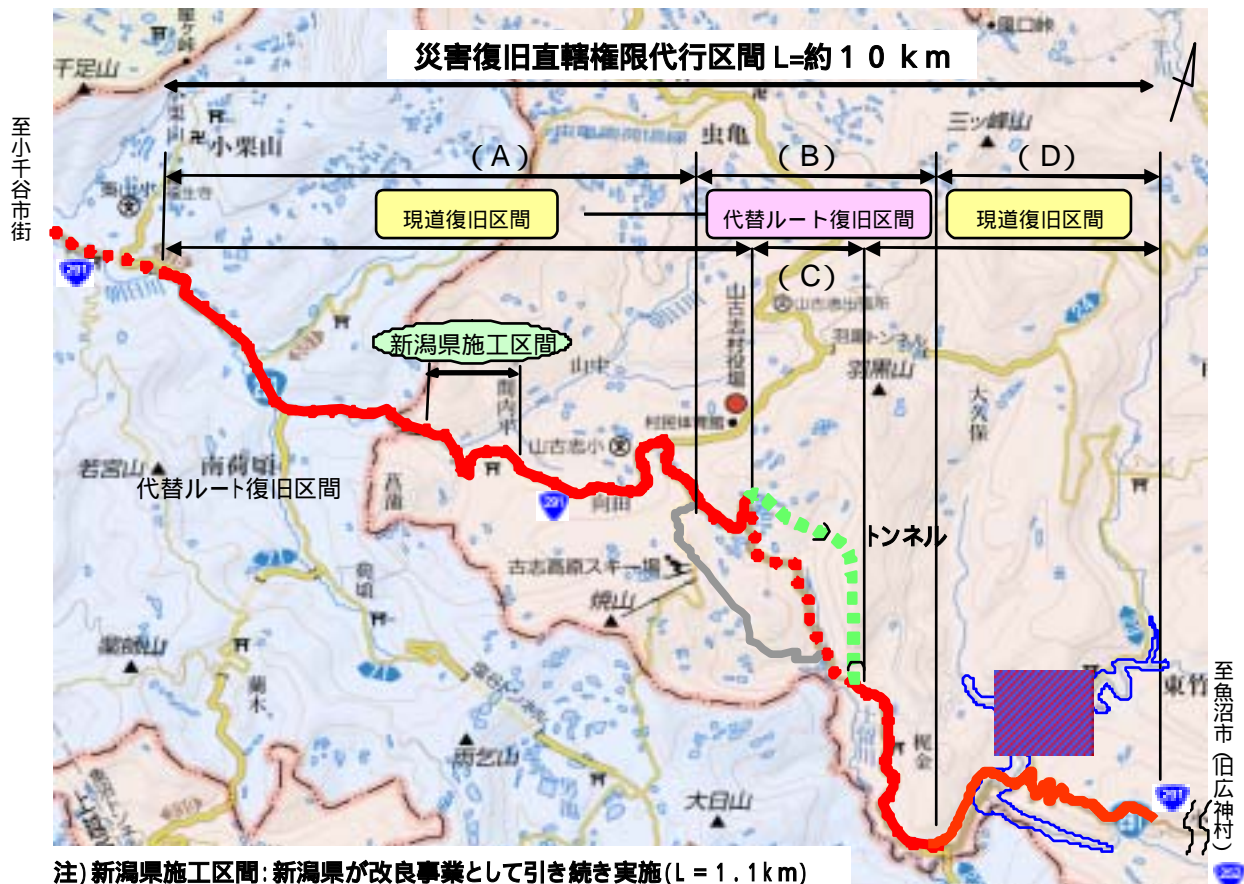
2005.2.18 現在

1.1. 国道 291 号

直轄権限代行区間 10 km

区間	距離	応急処置	復旧計画
小千谷市 小栗山地区 ～ 山古志村 竹沢地区 (A)	約 4km	応急復旧 応急復旧 (H16.12.20) 工事用車両・緊急車両の通行確保	既存ルートで復旧
山古志村 竹沢地区～ 東竹沢地区の区間 (B)	約 3km	工事用道路整備 山古志村 梶金集落入り口 (H16.12.14) 梶金地区の車両搬出 (H16.12.5)	既存ルートで復旧
うち 竹沢 ～ 梶金地 区 (C)	うち約 1km	大規模な土砂崩壊等が発生したため、別ル ートで対応	対岸の山にトンネルを建設 (約 800 m)
東竹沢 (梶金)～ (小松倉) (D)	約 3km	芋川の河道閉塞により一部が水没	・ 既存ルートで復旧 ・ 水没した新宇賀地橋を架け替える。

新潟中越地震災害一般国道 291 号復旧計画



1.2. 河道閉塞

1) 基本方針

芋川に形成された河道閉塞に対する恒久的な対策と併せて、山古志村復興計画と整合を図りつつ、芋川流域の大量の生産土砂量に見合う適切な砂防計画を策定し、今後予想される土砂流出に対する、芋川流域内および下流地域の安全を確保する。芋川に形成された河道閉塞に対する恒久的な対策と併せて、山古志村復興計画と整合を図りつつ、芋川流域の大量の生産土砂量に見合う適切な砂防計画を策定し、今後予想される土砂流出に対する、芋川流域内および下流地域の安全を確保する。

2) 芋川流域内の崩壊・地すべり・河道閉塞箇所数

崩壊・・・842箇所

地すべり・・・124箇所

河道閉塞箇所・・・52箇所（うち、9箇所は流出）

）10月24日撮影空中写真の判読結果、10月28日計測航空レーザー測量による地形データ、12月12日ヘリコプター調査結果に基づく

3) 暫定的な不安定土砂量

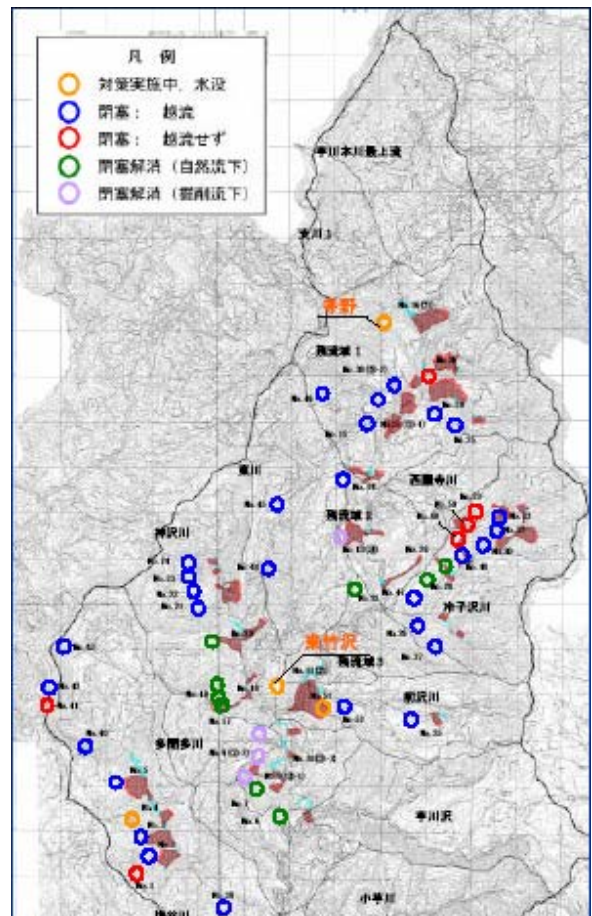
少なくとも約980万m³

崩壊に起因する不安定土砂量：約210万m³

地すべりに起因する不安定土砂量：約770万m³



融雪出水（1～5月）や出水（6～9月；梅雨期・台風期）には大量の土砂が流出し、芋川流域内および下流地域において土砂災害・浸水被害が発生する可能性が大。



4) 恒久対策案の例

現在、寺野地区、東竹沢地区における砂防計画を下記の案などを検討中である。

< 寺野 >

case1	砂防堰提1基案
case2	砂防堰提2基案
case3	砂防堰提3基案

< 東竹沢 >

case1	現仮排水路高を利用する案
case2	現仮排水路高を掘り下げる案
case3	現仮排水路をほぼ元の河床まで掘り下げる案

1.3.その他

1) 山古志村内の国、県、村道の復旧計画

「山古志村道路復旧調整会議」において、国道、県道、村道1級、2級までを対象に、全体のネットワークの観点から調整している。

< 村内道路 >

23号 柏崎高浜堀之内線 24号 枳尾山古志線 71号 小千谷川口大和線
 230号 竜之又堀之内線 415号 茂沢竜光線 474号 竹沢塩谷線
 514号 水沢新田種芋原線 515号 濁沢種芋原線 551号 虫亀南荷頃線
 563号 南平小平尾線

2) 農地関連の被害状況

山古志村の農地 面積 戸数 165.47ha 381戸

< 農地関連の被害状況 >

農地	農業用施設(1,752箇所)					合計
	ため池	水路	道路	橋梁	農地保全	
124.0ha 525箇所	194箇所	460箇所	1,029箇所	4箇所	65箇所	2,277箇所

山古志村被害額・集落別申請額一覧より作成

天水田自然乾燥コシヒカリ

約165haのうち30haが自然乾燥のはざかけ米である。天水田と自然乾燥によりつくられるまぼろしのこしひかり。

3) 養殖施設の被害状況

養殖施設災害復旧事業の概要(1~3次査定後)箇所数

1次			2次			3次			合計		
野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計
10	-	10	14	-	14	11	-	11	35	-	35

養殖施設災害復旧事業の概要(今後申請見込)箇所数

4次			5次			6次			合計		
野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計	野池	越冬施設	計
500	12	512	550	20	570	550	20	570	1,600	52	1,652

今後申請見込の野池箇所数は、池数。1~3次は、716箇所を230箇所にまとめている。(1箇所=3.1箇所)

養殖施設災害復旧事業の概要より作成

4) ライフライン

< ライフライン状況 (12月28日) >

電 気	停電戸数...約 260 戸 (電灯契約口数、東竹沢地区) 陸路遮断等により、復旧時期未定
都市ガス	L P ガス利用
上 水 道	全地域で断水...650 世帯 復旧については、山古志村の総合的な復興計画のもとで調整を図る。(来年 4 月以降の復旧)
下 水 道	【公共下水道施設】施設なし 【農業集落排水施設】施設なし 浄化槽の被害状況不明

この資料は、現在検討中のものや調査中の情報が含まれておりますのでご注意ください。

山古志村被害概況図

死者・負傷者・避難者（2004年12月15日9:00現在）

死者	負傷者	避難者（ピーク時）
2名（0.09%）	25名（1.13%）	2,167名（97.5%）

住宅被害（2004年12月15日9:00現在）

全壊	半壊	一部損壊	火災
データなし	データなし	0	0

ライフラインの被害状況（2004年12月28日16:00現在）

電 気	停電戸数...約260戸（電灯契約口数、東竹沢地区） 陸路遮断等により、復旧時期未定
都市ガ ス	L P ガス利用
上 水 道	全地域で断水...650世帯 復旧については、山古志村の総合的な復興計画のもとで調整を図る。（2005年4月以降の復旧）
下 水 道	【公共下水道施設】施設なし 【農業集落排水施設】施設なし 浄化槽の被害状況不明

出典：新潟県中越大地震災害対策本部資料

山中
人口：58人
世帯：12世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
2件<家屋倒壊(1)、小屋倒壊(1)>
農地関連被害状況
・農地：1.69ha、3箇所
・農業用施設
・ため池：1箇所
・水路：1箇所
・道路：1箇所

間内平
人口：84人
世帯：26世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
0件
農地関連被害状況
・農地：1.17ha、2箇所
・農業用施設
・ため池：不明
・水路：不明
・道路：1箇所

菖蒲
人口：19人
世帯：7世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
0件
農地関連被害状況
<不明>

竹沢
人口：272人
世帯：78世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
4件<家屋倒壊(4)>
農地関連被害状況
・農地：5.72ha、9箇所
・農業用施設
・ため池：2箇所
・水路：2箇所
・道路：3箇所

梶金
人口：86人
世帯：29世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
5件<家屋倒壊(4)、作業所倒壊(1)>
農地関連被害状況
・農地：2.75ha、4箇所
・農業用施設
・ため池：1箇所
・水路：1箇所
・道路：2箇所

木籠
人口：65人
世帯：24世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
0件
農地関連被害状況
・農地：5.41ha、9箇所
・農業用施設
・ため池：2箇所
・水路：2箇所
・道路：3箇所

虫亀
人口：436人
世帯：144世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
0件
農地関連被害状況
・農地：18.34ha、29箇所
・農業用施設
・ため池：7箇所
・水路：7箇所
・道路：11箇所

油夫
人口：68人
世帯：20世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
3件<家屋倒壊(2)、小屋倒壊(1)>
農地関連被害状況
・農地：3.29ha、5箇所
・農業用施設
・ため池：1箇所
・水路：1箇所
・道路：2箇所

桂谷
人口：119人
世帯：39世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
3件<小屋倒壊(3)>
農地関連被害状況
・農地：3.71ha、6箇所
・農業用施設
・ため池：1箇所
・水路：1箇所
・道路：2箇所

種芋原
人口：592人
世帯：189世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
1件<小屋倒壊>
農地関連被害状況
・農地：77.17ha、136箇所
・農業用施設
・ため池：24箇所
・水路：33箇所
・道路：43箇所

種芋原保育所：一部改修
山古志村種芋原診療所：新築中で中断

池谷
人口：97人
世帯：35世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
9件<家屋倒壊(9)>
農地関連被害状況
・農地：9.12ha、15箇所
・農業用施設
・ため池：3箇所
・水路：3箇所
・道路：5箇所

大久保
人口：51人
世帯：19世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
8件<家屋倒壊(6)、小屋倒壊(2)>
農地関連被害状況
・農地：5.52ha、5箇所
・農業用施設
・ため池：1箇所
・水路：8箇所
・道路：9箇所
・農地保全：1箇所

榎木
人口：108人
世帯：29世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
5件<家屋倒壊(4)、古屋倒壊(1)>
農地関連被害状況
・農地：11.44ha、18箇所
・農業用施設
・ため池：4箇所
・水路：4箇所
・道路：6箇所

小松倉
人口：68人
世帯：25世帯
積雪のために倒壊した家屋等：
5件<店舗(自宅一部)倒壊(1)、作業所倒壊(1)、車庫倒壊(1)、越冬小屋倒壊(錦鯉)(2)>
農地関連被害状況
・農地：5.62ha、9箇所
・農業用施設
・ため池：2箇所
・水路：2箇所
・道路：3箇所

山古志中学校校舎：全壊
屋体：全壊

山古志村役場本庁舎：全面改修

山古志小学校校舎：全壊
屋体：全壊

山古志村診療所：一部半壊
山古志村民会館：一部半壊

竹沢保育所：一部改修

山古志村錦鯉総合センター：一部改修

民俗資料館：全壊

魚沼市

凡 例	
	国 道
	主要地方道
	一般県道
	村 道
	上水道配水管
	行政区境界
	地区界
	水面・養鱈池
	道路寸断箇所
	震源地(震度5以上)
	震源地(震度4以上)
	震源地(震度3以上)
	地すべり箇所
	河堤閉塞による滞水区域
	農 地
	集 落
	地すべり防止区域

出典：山古志村役場資料、山古志村被害額・集落別申請額一覧、山古志村災害公共施設(建物)一覧表
この資料は、現在検討中のものや調査中の情報が含まれておりますのでご注意ください。
人口及び世帯数は、平成16年12月31日現在。積雪のため倒壊した家屋等は、平成17年2月3日現在。

資料 2 . アンケート調査結果

被災後、全村民避難が続いている山古志村民を対象として、「山古志村・山古志復興新ビジョン研究会」の共同によるアンケート調査を実施している。本アンケートの調査結果については、個人のプライバシーに関わる質問も含まれていることに鑑み、調査結果については「アンケート調査概要」としての公表としている。

目次

「今後の生活と復興に関する意向調査」調査結果の要約（速報版）

**「今後の生活と復興に関する意向調査」
調査結果の要約（速報版）**

当資料の数値はH17年2月22日現在の速報値です。今後、分析を進める過程で、数値が若干修正される場合がございます。

平成17年2月22日

山古志復興新ビジョン研究会

調査概要

1. 調査目的

震災により甚大な被害を受けた山古志村住民の、帰村に対する意識や復興・復旧へ向けての意見や要望を把握し、「山古志復興新ビジョン」策定のための参考資料とする。

2. 調査対象

山古志村全世帯（原則として世帯主が回答）
676世帯 [仮設住宅入居世帯:578、仮設住宅非入居世帯:98]

3. 調査方法

質問紙による自記入式の留め置き調査、一部聞き取り調査を実施
(訪問配布、訪問回収・一部郵送回収)

仮設住宅に入居していない世帯には郵送調査を実施

4. 調査時期

平成17年1～2月

5. 調査実施機関

山古志村・山古志復興新ビジョン研究会（共同で実施）

6. 有効回収数

587票 [仮設住宅入居世帯:518票、仮設住宅非入居世帯:69票]

7. 回収率

86.8%

山古志村全世帯数(676世帯:H16.12.31現在、住民基本台帳)に対する回収率

8. 性・年齢別回収結果

<性別> 男性:495人(84.3%)、女性:84人(14.3%)、無回答:8人(1.4%)

<年齢> 30代以下:32人(5.5%)
40代 :46人(7.8%)
50代 :146人(24.9%)
60代 :157人(26.7%)
70代 :145人(24.7%)
80代以上:51人(8.7%)
無回答 :10人(1.7%)

原則として世帯主が回答しているため、男性の比率が高く、年代も高めになっている(平均62.85歳)。

調査結果の要約

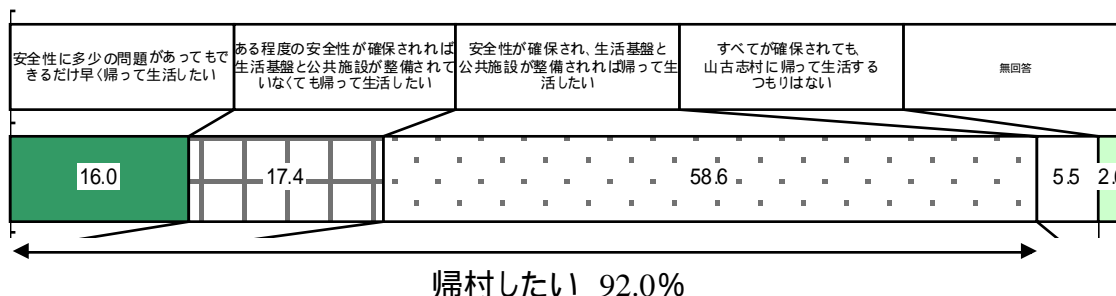
1. 帰村に対する考え方・意識

・92%が「村へ帰って生活したい」と回答。

- ・村民の帰村意識は強く、「村へ帰って生活したい」とする回答が92%を占めた。6割近くが「安全性の確保や生活基盤・公共施設等が整えば」としており、帰村を冷静に捉えている。
- ・帰村時期については、約半数(52.3%)が「今年中」の帰村を希望している。しかし「来年中に」(15.8%)、「(仮設住宅の期限である)2年後」(24.2%)と、来年以降と考えている村民もあわせて4割を占めている。
- ・若い世代ほど、安全性や生活基盤などの条件が整ってから帰村したい、とする意識が強く、冷静に帰村条件を見据えている。
- ・仮設住宅に入居している世帯の92.9%に比べるとやや低いものの、仮設住宅に入居していない世帯でも85.5%が帰村したいと回答している。

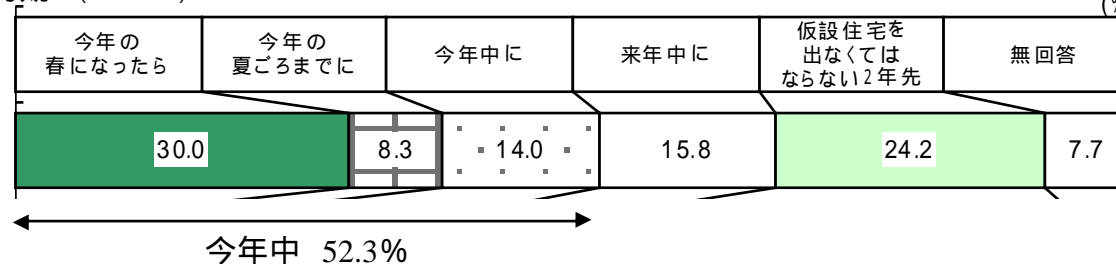
帰村意識と帰村条件 (N=587)

(%)



帰村時期 (N=587)

(%)

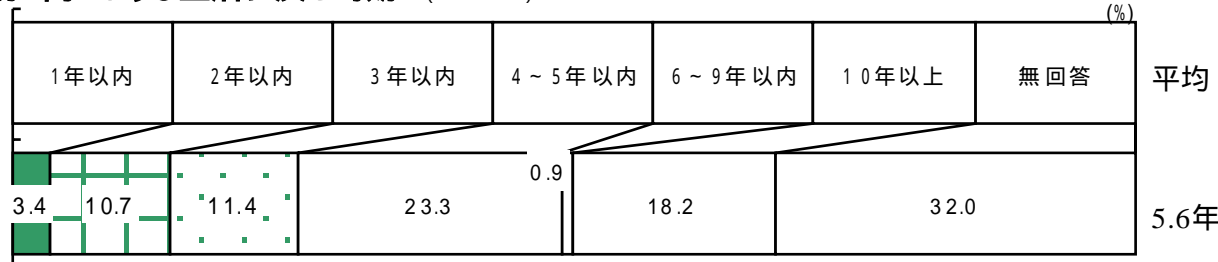


・震災前と同じような生活に戻るには5～6年必要。

- ・震災前とほぼ同じような生活へ戻る時期については「3年以内(1年以内～3年以内の合計)」が25.5%、「4～5年以内」が23.3%。一方「10年以上」とする人も18.2%を占め、平均では5.6年。若い世代ほど時間がかかると考えている。

震災前と同じような生活に戻る時期 (N=587)

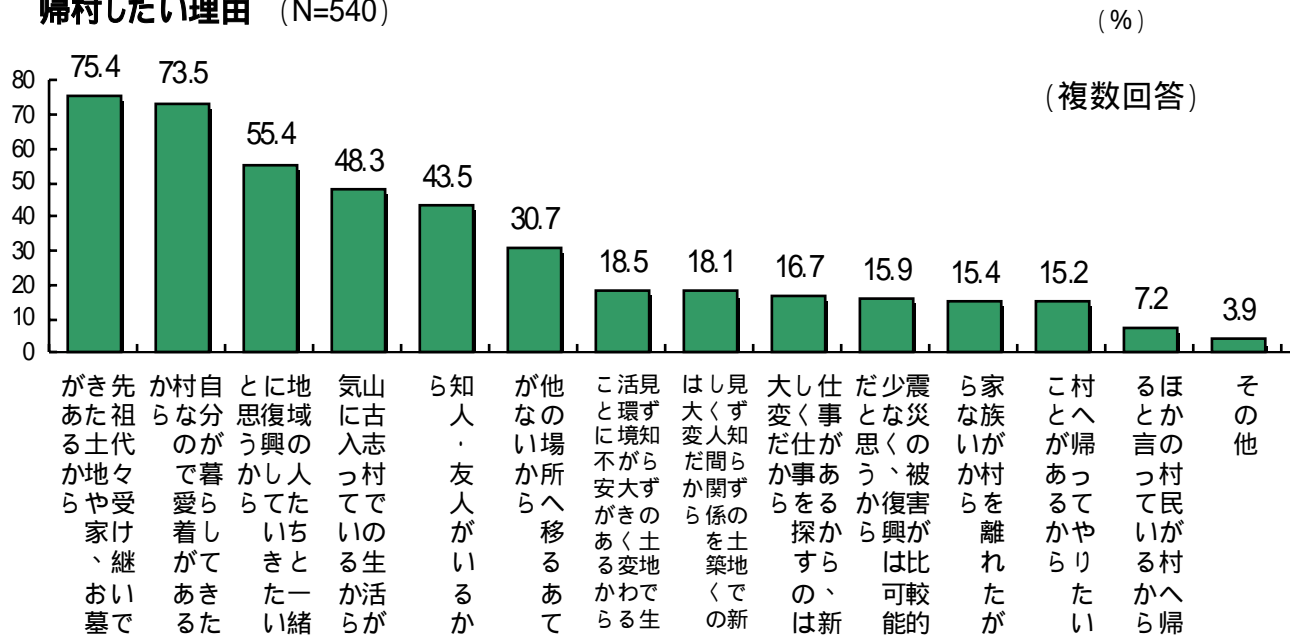
(%)



・**帰村したい理由は「先祖代々の土地や墓があるから」、「愛着があるから」。**

- ・「先祖代々受け継いできた土地や家、お墓があるから」(75.4%)、「自分が暮らしてきた村なので愛着があるから」(73.5%)が上位2項目。次いで、「地域の人たちと一緒に復興していきたい」(55.4%)となっている。
- ・高齢層ほど、「先祖代々の土地や家、墓がある」ことを帰村の理由にあげる人が多い。
- ・仮設住宅に入居していない世帯では、「先祖代々の土地や家、墓があるから」(89.8%)が極めて高い。

帰村したい理由 (N=540)



・**今まで住んでいたところ、もしくはその近くへの帰村を希望する人が多数。**

- ・帰村する際に、震災前と同じ場所に帰れない可能性もあるが、村民の多くは「今まで住んでいたところと全く同じ場所」(33.1%)、「今まで住んでいたところと近い場所」(42.0%)へ戻ることを希望している。
- ・比較的被害が軽微とされる種芋原、虫亀地区では「全く同じ場所」を希望する世帯が多いが、被害が大きいとされる南平や東竹沢では、「近い場所であればよい」とする意見が、他の集落よりも多い。

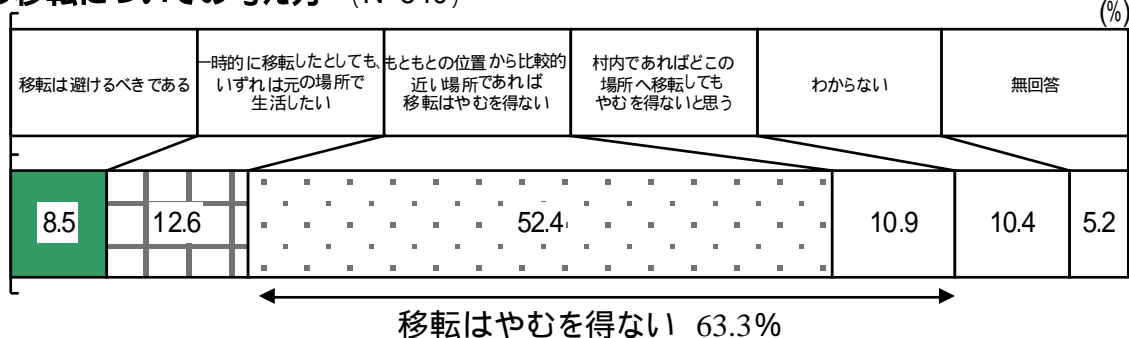
帰村場所 (N=540)

帰村場所	割合 (%)
今まで住んでいたところとまったく同じ場所でないが、帰りたい	33.1
今まで住んでいたところと近い場所であればよい	42.0
もともと住んでいた集落と比較的近い場所であればよい	10.0
山古志村に帰ることができれば場所にはこだわらない	4.8
わからない	6.1
無回答	3.9

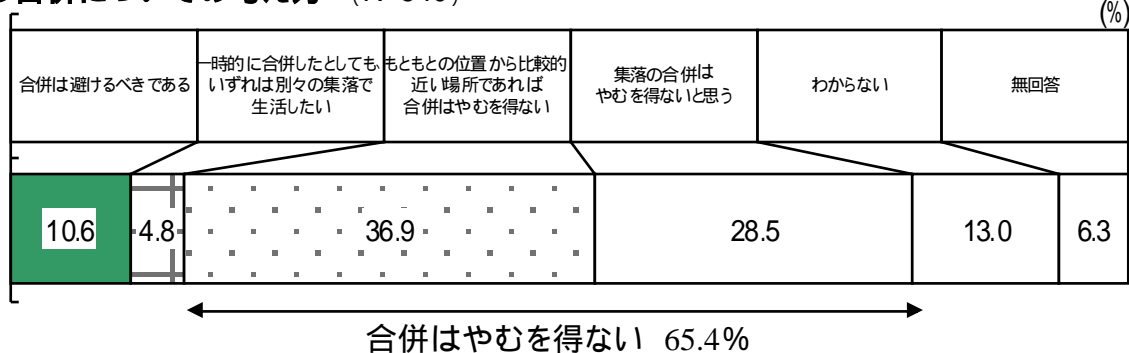
・**集落の移転・合併もやむを得ないとする意見が6割以上を占める。**

- ・山古志村には14の集落があるが、被災状況に差があるため、元の場所に戻れない可能性もある。こうしたことをふまえた集落の移転や合併については、いずれも「近い場所への移転」「近隣集落との合併」はやむを得ないとする意見が多数を占めた。
- ・「移転はやむを得ない」とする意見は63.3%、「合併はやむを得ない」は65.4%を占めており、被害の大きさとともに、村民が冷静に集落の被災状況を捉えていることが読みとれる。

集落の移転についての考え方 (N=540)



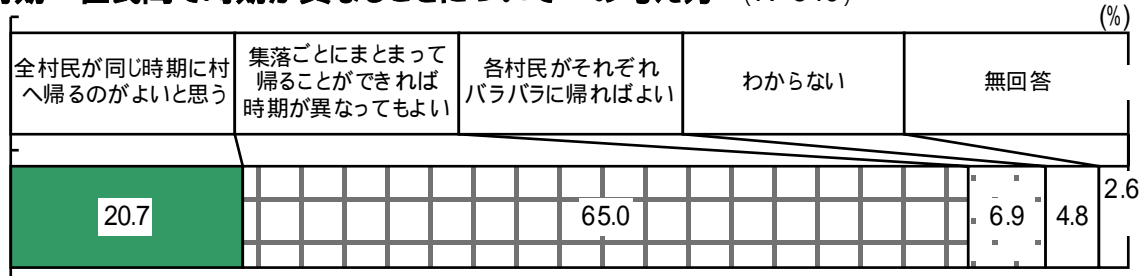
集落の合併についての考え方 (N=540)



・**住民間で帰村の時期に差が生じることに関しては3分の2近くが容認。**

- ・被害の状況によって住民や集落間で帰村時期に差が生じる可能性もあるが、「集落ごとにまとまって帰ることができれば、帰村時期が異なってもよい」とする意見が多数(65.0%)を占めた。「村民がバラバラに帰ればよい」とするのは6.9%にとどまっている。
- ・仮設住宅に入居していない世帯では「全村民が同じ時期に帰るのがよい」が13.6%と低いが、「集落ごとにまとまって帰る」が64.4%を占め、「村民がバラバラに」とするのは8.5%と少数派。

帰村時期 < 住民間で時期が異なることについて > の考え方 (N=540)

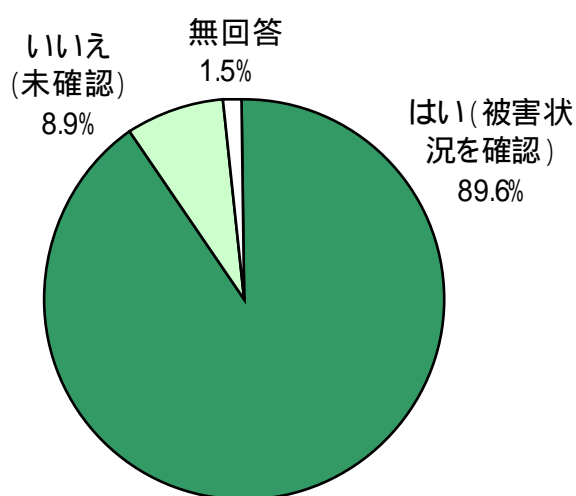


2. 被害状況に対する評価

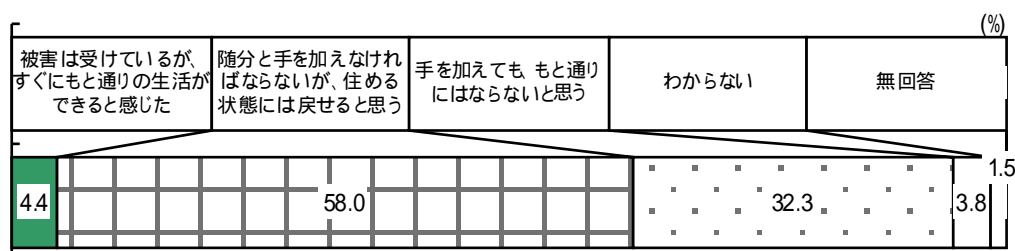
・集落の被害状況は、「手を加えなければならないが、住める状態には戻せる」というのが多くの村民の実感。

- ・9割近くが村や集落の被害状況を実際に自分の目で確認しているが、そのうちの6割弱(58.0%)が「随分と手を加えなければならないが、住める状態には戻せると思う」と感じている。
- ・ただし、60代以上では約3分の1以上が「手を加えても、もと通りには戻らないと思う」との評価をしており、また被害の大きかった集落でも、「もと通りには戻らない」とする意見が多くなっている。

「村や集落」の被害状況の自己確認 (N=587)



被害状況の実感(集落) (N=526)

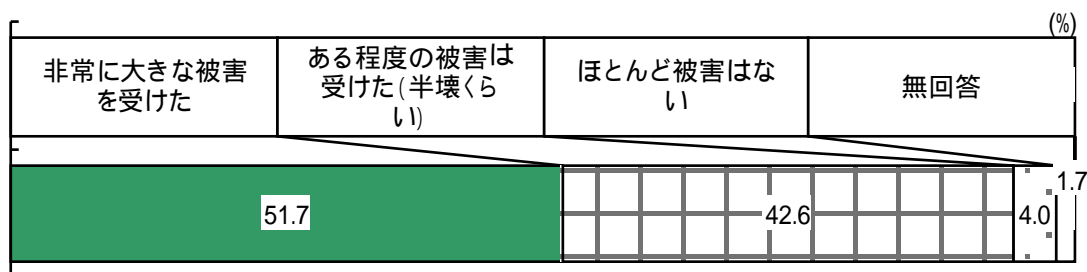


・自宅に関しては5割、農地に関しては7割弱の村民が「非常に大きな被害を受けた」と評価。

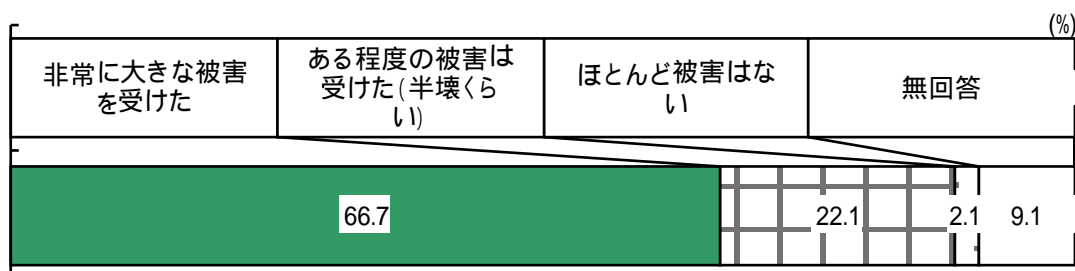
・自宅の被害状況は「非常に大きな被害」が51.7%、「ある程度の被害(半壊くらい)」が42.6%。農地・養鯉池・牛舎などの被害状況は、「非常に大きな被害」が66.7%、「ある程度の被害(半壊くらい)」が22.1%、というのが村民の被害状況の実感。

・被害の大きかった集落ほど、「非常に大きな被害を受けた」と評価する人の割合が高い。

被害状況の実感(自宅) (N=526)



被害状況の実感(農地・養鯉池・牛舎など) (N=526)

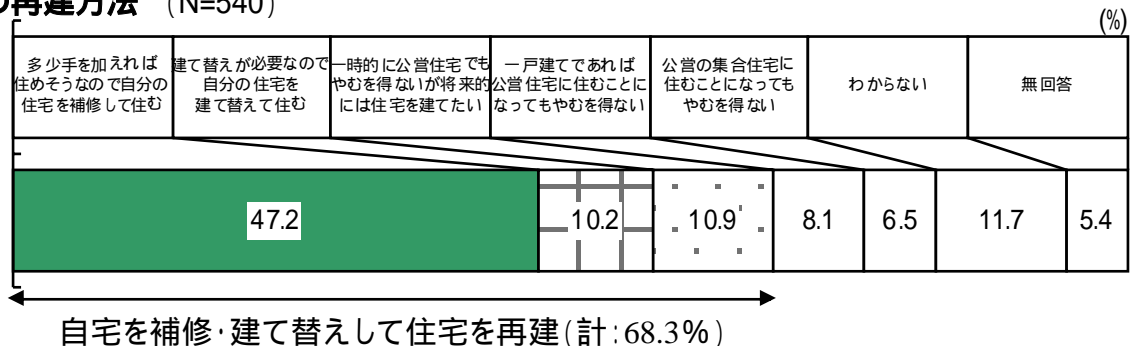


3. 復旧・復興へ向けての考え方・意識

・村民の約3分の2は、自宅の補修・建て替えによる再建を想定。

- ・住宅の再建方法では、「自宅を補修する」(47.2%)、あるいは「自宅を建て替える」(10.2%)との意見が多く、自宅を補修・建て替えて住宅を再建するという意見が7割弱(68.3%)を占めている。
- ・ただし、自宅の再建はあきらめ、公営住宅への入居もやむを得ないとする人も14.6%にのぼる。

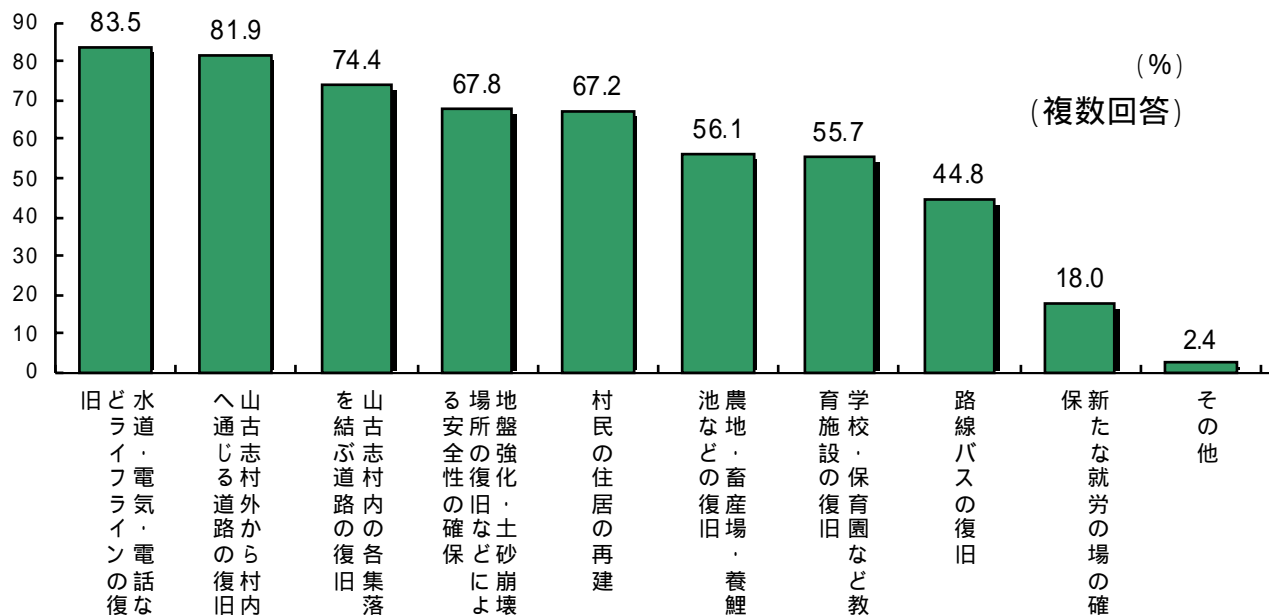
住宅の再建方法 (N=540)



・「ライフラインの復旧」、「村内外の道路の復旧」が村で生活するためには不可欠。

- ・村へ帰って生活するのに必要なこととして村民が望んでいるのは、「水道・電気・電話などライフラインの復旧」(83.5%)、「山古志村外から村内へ通じる道路の復旧」(81.9%)、「山古志村内の各集落を結ぶ道路の復旧」(74.4%)が上位。
- ・学校等へ通う子供がいる40代以下の世帯では、「学校・保育園など教育施設の復旧」を重視する傾向にある。
- ・仮設住宅に入居していない世帯では「村外から村内へ通じる道路」(79.9%)、「ライフライン」(76.3%)の順となっている。

村で生活するために必要なこと (N=540)

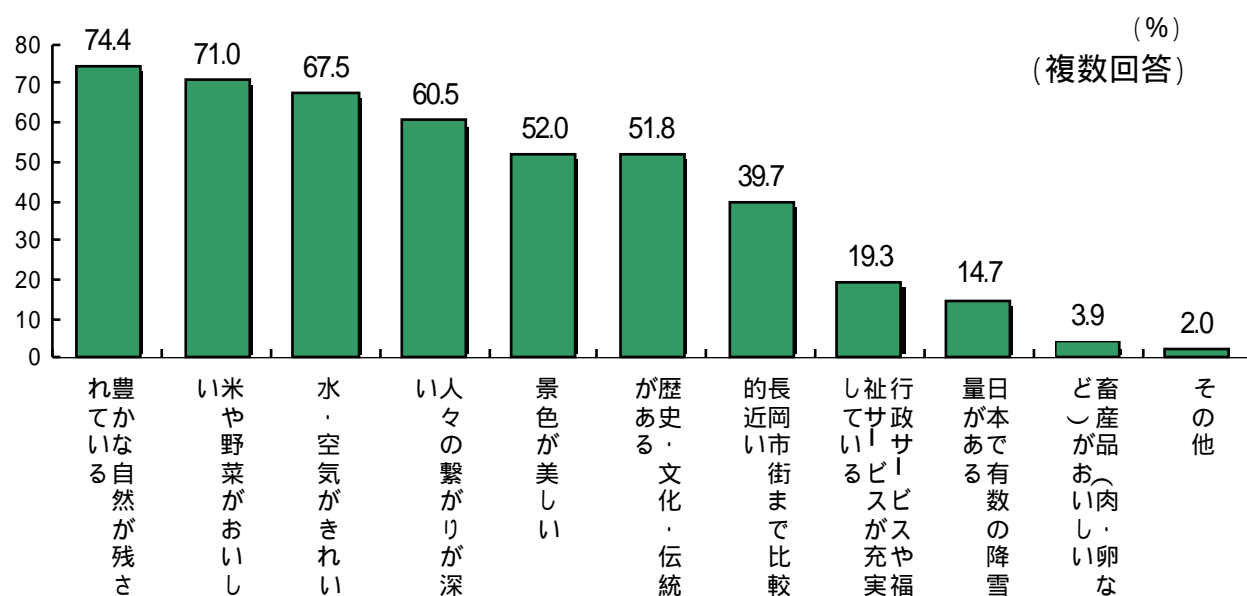


・山古志村民は「豊かな自然」、「おいしい米や野菜」、「きれいな水や空気」を山古志村の魅力として意識している

・村民自身が考える山古志村の魅力は、「豊かな自然が残されている」(74.4%)、「米や野菜がおいしい」(71.0%)、「水・空気がきれい」(67.5%)が上位3項目。「人々の繋がりが深い」(60.5%)が続いている。

・若い世代ほど「豊かな自然」を山古志の魅力と考えている。(40代以下:87.2%)

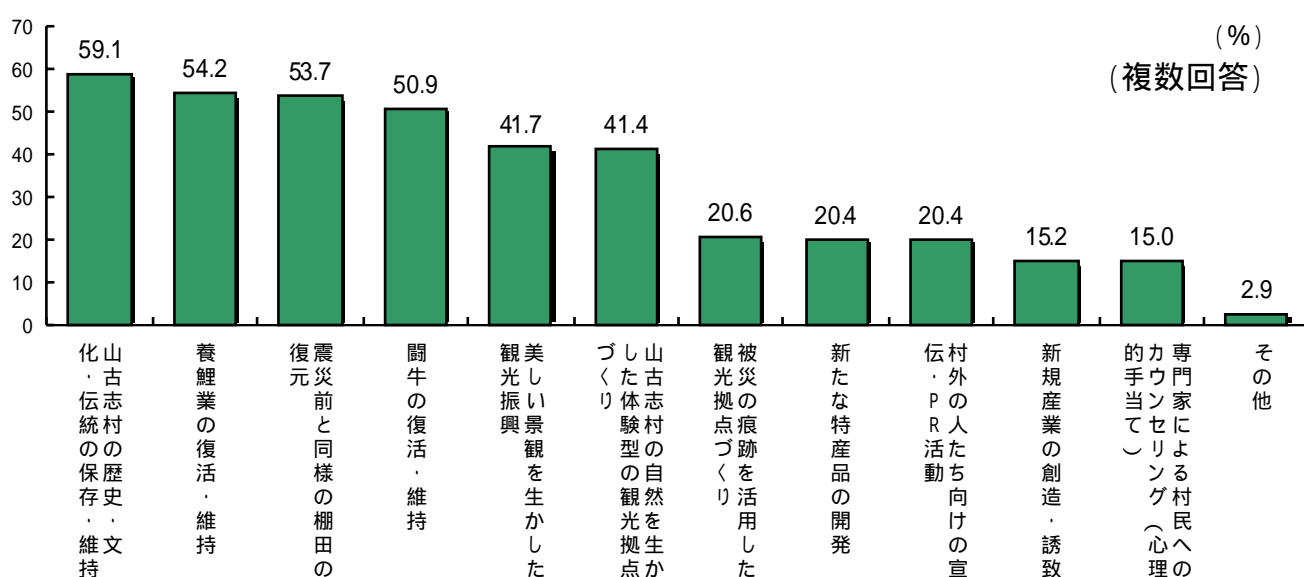
山古志の魅力 (N=587)



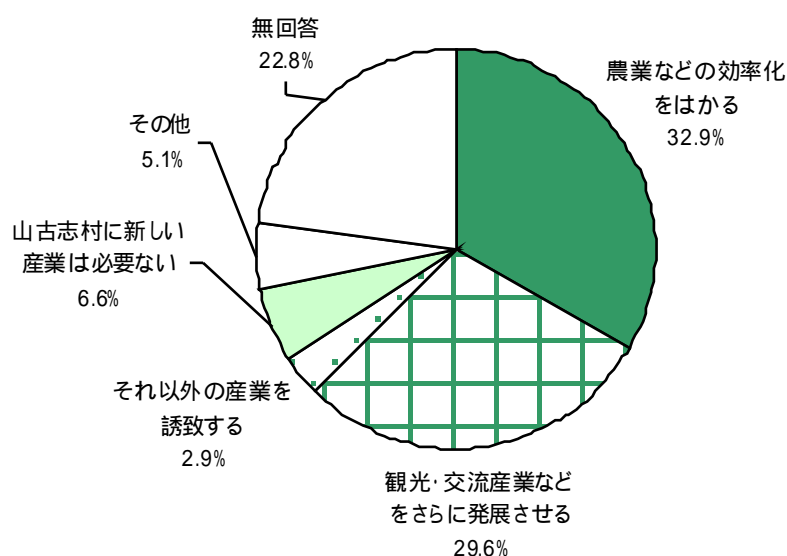
・農業とともに、歴史や伝統、自然など、山古志の資源をいかした観光振興に期待。

- ・山古志の復興に向けて必要な今後の取り組みとしては、「歴史・文化・伝統の保存・維持」(59.1%)、「養鯉業の復活・維持」(54.2%)、「棚田の復元」(53.7%)、「闘牛の復活・維持」(50.9%)などが上位を占めた。
- ・一方で「美しい景観を生かした観光振興」(41.7%)、「山古志の自然を生かした体験型の観光拠点づくり」(41.4%)など、村の資産である自然や美しい景観をいかした新しい観光振興への期待も大きい。特に50代以下の若い世代では、半数以上が「観光振興が必要」としている。
- ・将来の産業についても「農業」とならんで「観光・交流産業」をあげる村民が多く、仮設住宅に入居していない世帯では、「観光・交流産業の発展」(30.4%)が「農業の効率化」(26.1%)を上回っている。

山古志を復興させるのに必要な取り組み (N=587)



将来の産業について (N=587)



世代別特徴

- ・帰村意識では、若い世代(40代以下)で安全面・生活基盤が整ってから帰村したいとする意識が強い。
- ・帰村時期も「今年中に帰村したい」とする人の割合は高齢の世代に比べて低く、また、震災前とほぼ同じような生活に戻る時期についても、「10年以上」とする人の割合が高いなど、若い世代は、より冷静に帰村条件・帰村時期を見据えている。
- ・帰村したい理由では高齢の世代ほど「先祖代々の土地や墓があるから」という意見が多く、70代以上では86.4%にのぼる(40代以下は61.6%)。
- ・帰村場所では、70代以上の高齢世代で「今まで住んでいたところと全く同じ場所でない」と帰村したくないとする人が41.5%にのぼる(40代以下は29.1%)。
- ・また、集落の移転をやむを得ないとする高齢者世代は51.1%(40代以下は79.5%)、集落の合併をやむを得ないとする人も62.5%にとどまり(40代以下は76.7%)、震災前の居住・生活形態にこだわる傾向が若い世代に比べ、より強く出ている。
- ・被害状況(村や集落)に関しては、60代以上の約3分の1以上(36.5%)が「手を加えてももと通りには戻らないと思う」との評価をしており、50代以下(26.5%)に比べ高い。
- ・村で生活するために必要なことでは、学校等へ通う子供の居る40代以下の世帯で「学校・保育園など教育施設の復旧」を重視する傾向にある。
- ・山古志村の魅力については、若い世代ほど「豊かな自然」をあげる人の割合が高い。

仮設住宅への入居・非入居別の特徴

- ・仮設住宅に入居していない世帯の帰村意識は、仮設住宅に入居している世帯の92.9%と比べるとやや低いが、それでも85.8%が帰村を希望している。
- ・仮設住宅に入居していない世帯の89.8%が「先祖代々の土地や家、墓がある」ことを帰村したい理由にあげている(仮設住宅入居世帯は73.6%)。
- ・仮設住宅に入居していない世帯は「全村民が同じ時期に帰るのがよい」が13.6%と低い。(仮設住宅入居世帯は21.6%)
- ・仮設住宅に入居していない世帯のうち、村や集落の被害状況を確認したものは70.3%にとどまる(仮設住宅入居世帯は90.5%)。
- ・仮設住宅に入居していない世帯が村で生活するために必要と考えているのは「村外から村内へ通じる道路」(79.9%)、「ライフライン」(76.3%)の順に多い(仮設住宅入居世帯では「ライフライン」(84.4%)が最も多い)。
- ・仮設住宅に入居していない世帯では、将来重視すべき新しい産業について、「観光・交流産業の発展」(30.4%)が「農業の効率化」(26.1%)を上回っている。全般的に村外との関係をより重視している傾向がうかがわれる。

集落別特徴

- ・比較的被害が軽微とされている種芋原、虫亀地区では「現住地近辺」への帰村を希望する世帯が多く、「今年中」の帰村を希望する人も多い。
- ・一方、被害が大きいとされる南平や東竹沢では、「多少離れた地域でも」とする意見が多く、「今年中」の帰村を希望する人の割合は、他の集落よりも低くなっている。
- ・村で生活するために必要なことでは、比較的被害の大きかった東竹沢、南平では「住居の再建」が不可欠とする意見が多く(それぞれ74.0%、81.1%)、被害の軽微だった種芋原、虫亀、(それぞれ58.7%、64.0%)に比べ高くなっている。

資料3 . ヒアリング調査結果

「山古志復興新ビジョン」の検討を進めていくにあたり、山古志村民のなかから、各世代層別に人選し、ヒアリング調査を実施した。復旧・復興に対する意向を取りまとめたものであり、「ヒアリング調査概要」として公表している。

目次

山古志村民へのヒアリング調査（中間速報）

山古志村民へのヒアリング調査（中間速報）

- ・帰村するという意識は全般的に強い。しかし、ライフラインや住宅の問題、集落ごとの被害の違いなど、現実を冷静にとらえている。
- ・住宅再建の問題や仕事の問題から山古志を離れる人が生まれることへの懸念もある。また仮設住宅の暮らしの問題を指摘する声もある。
- ・復興については前向きに考えており、観光・交流産業の活性化には好意的な意見が多い。復興の推進役は山古志の住民という意識もあり、復興に関する勉強会への期待や参加意欲もみられた。
- ・被災地を残すことについては、「良いのではないか」としつつも、「被災集落の意見を聞くべき」と、配慮を求める声が多い。
- ・復興への課題として農地や施設への被害の大きさへの懸念、また共同での取り組みを疑問視する声もあげられている。

< 発言要旨 >

対象者プロフィール	1. 帰村に対する考え方	2. 今後の生活や住民の動向等について	3. 復興に対する考え方や期待	4. 復興を進める上での課題等
20代女性 竹沢 大学生 (長岡市へ通学)	<ul style="list-style-type: none"> ・山古志村の魅力は、平和なところ。近所のおばちゃんには、家に案内しなくても上がってくる。 ・帰村の際の条件は、<u>道路の復旧、除雪、ライフラインでは電気が必要</u>。ガスはプロパンで、水は地下水・井戸であるため、何とかなる。 ・すぐにでも帰りたいが、うちだけ帰っても、<u>周りに人が住んでいないと不安</u>である。 ・自宅が雪によって倒壊した友人もいるが、その子は<u>山古志に帰る場所が欲しい</u>と言っている。 ・山古志村長が「9月に帰村を」と言っていることに対しては、<u>帰れるという実感はない</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山古志でお洒落な産業・企業があれば、多少<u>給料が安くても勤めてみたい</u>。 ・被災地を保存し防災学習に活用するという考え方については、自分が<u>記憶を忘れないこと</u>と、訪れた人が見て教訓を学んでもらえるのなら、個人的には残してもよいと思う。 ・小さい子供たちは被災の心のダメージを受けているので、山古志に帰りたくないと言っている。大人は、復旧工事費用がかかるので修理しなくても良いという考え方になると思う。 ・あちこちからイベントや励まそうと人が来ることに対しては、個人的にはそっとしておいて欲しいと思うこともある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい産業の立ち上げで、<u>学習・研修制度があれば参加したい</u>。 ・山古志を離れている人でも、イベント時期になると村に帰ってくる人が多い。<u>家がなくても、村に帰る意識がある</u>。山古志村民は、出て行った山古志出身者とも繋がりがあがる。 ・復興を進めるために欲しい情報や支援活動は今のところ特にない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同級生は31人、そのうち残っている人は6～7人。長岡市内に通勤・通学している。山古志村から出ていっている人たちは、<u>つまらないから出て行く</u>と思う。 ・山古志に新しい企業ができて、同級生では県外で仕事をしている人もいるので、<u>戻ってくるのは難しい</u>と思う。
30代男性 虫亀 会社員 (村内・一時離職中)	<ul style="list-style-type: none"> ・全村民が<u>一斉に帰村するのは無理</u>だと思う。これまで、無理に村に帰ろうとする人はいなかった。 ・ライフラインで「水」の確保は、一昨年まで井戸水を使っていたので、<u>水が流れていなければ水は確保できる</u>。 ・木籠集落は、集落の近くの山を削って平地に集落再建するか、他の集落へ分散するしかないのではないかと。 		<ul style="list-style-type: none"> ・棚田を観光で残すという視点は、棚田で米を作っている人と、棚田を見に来る人とは「<u>棚田の使い方</u>が違うので、観光で残すことができるかどうかかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・米は作れる量が決まっている。縁故米と自宅で食べる米を作っている。地震で、<u>田んぼは全滅</u>だった。田んぼに亀裂が数本入っており、水をはれるか分からない。また、復旧するにも田んぼまでの道が壊れている。 ・「あまやち会館」は、建物の被害があっても使えそうもない。
40代男性 梶金 会社員 (長岡市内) 自宅は全壊	<ul style="list-style-type: none"> ・帰村の条件は、<u>役場と学校</u>である。 ・働いている世代は家を再建できると思うが、高齢者はむずかしい。家は建てられないが、<u>山古志に住みたいという人も</u>いると思う。 ・全壊で住宅再建を必要とする集落は限られている。木籠地区は一度泥をかぶっており、来年も雪融けで浸水すると言われているので住めないのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は、長岡市でサラリーマンをしているので、山古志村に<u>新しい事業があっても、そこで働くことは考えられない</u>が、山古志村内で働いている人はどうかかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はさがけ米は、普通の米より1,000円～2,000円は高く売れている。 ・被災地を防災学習の場として残すことは、<u>直接被害を受けた集落の人に聞いた方が</u>良い。他は反対しないと思う。 ・観光の先進地の視察などを勉強し、将来、山古志の観光の営業マンになるような人は、<u>地元</u>に密着した人(地元で働いている人)ではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2～3反で、仕事の合間で米を作っている。3段の亀裂が入っており、水が流れるか心配である。 ・はさがけ米を作るのは手間がかかるため、販売できるだけの量を生産するには、<u>個人で作ることは難しい</u>。 ・先月、長岡市での営農再開の希望調査があったが、土地の貸し出し条件が厳しかったため、希望者が少なかったようだ。年貢代が高く、作った米をライスセンターに一度納めなければならぬため、借りののをやめた。自分の作った米は自分の物と考える人が多いのではないかと。
50代男性 虫亀 養鯉業(自営)	<ul style="list-style-type: none"> ・復興計画やスケジュールを見ると、<u>仕事復帰の時期が遅くなるのではないかと不安</u>になる。 ・村に帰っていいと言われたらすぐに帰る。 ・お金があれば、長岡に池を借りて養鯉はできるが、村としてはそれを応援していない。そのまま、長岡で仕事し、山古志から出て行くのではないかと。 ・<u>生活の場所は山古志</u>なので、復興するには山古志でなければならぬ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3階建て団地のような公営集合住宅であれば、山古志でなくてよく、山古志村には必要ないと思う。<u>集合住宅は、山古志村にはむかない</u>。 ・鯉の取引先から応援の声や、期待の連絡を受けるので、<u>早く養鯉業を復帰させたいという焦り</u>がある。 ・仮設住宅の生活では、補助金や物資支援、ほか様々な支援があり、<u>人間がおかしくなる</u>。仮設住宅での生活が良いものであれば、村民は村に帰らなくなる。 ・村で復興ビジョンを考えるとと言われても、<u>今日の生活が精一杯</u>で、復興計画を考えることはできないと思う。現状では、外から提案されたものに対して動かざるをえない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・虫亀の闘牛場の駐車場脇に宿泊施設を建てると、丘陵地で全体を見下ろせるので、棚田の風景を見るには良い。観光客から見下ろされるのは、苦ではない。 ・錦鯉で外国人客が200人くらい訪れたが、山古志の売りはタイムスリップしたような原風景があることである。5年くらい前から海外との取引がされるようになった。最近では、高齢者の方も村に訪れた<u>外国人</u>に対して抵抗がなくなっている。 ・山古志村が観光化し、村を訪れる人が多くなることは問題ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ報道で、牛や鯉を助けた人が報道されて、その助けた人達は、無断で村に入っているだろうが、「<u>良くやった</u>」と高評価される。一方で、村に入って鯉を助けたいが規則を守っている人が非難されるという、状況がある。 ・今回の地震被害で、<u>正直者や弱い者が復興・復旧に置いてか</u>れている感じがする。例えば、高齢者、車が乗れない人。 ・崩れた棚田を整地し、共同で営農できるかどうかは、土地所有者が役場に対して白紙委任できるかどうかかが問題である。

資料4 . 山古志土砂災害危険エリアの検討

1. 山古志復興新ビジョンとの位置付けと目的

本研究会が策定した「山古志復興新ビジョン」では、「安全性を最優先すること」を山古志復興の基本方針としています。山古志の復興においては、村内のほぼ全域の“大地”が甚大な被害を受け、今後の融雪期の出水や大雨による土砂災害の危険性が高いことから、その地の安全性の確保が不可欠であり、前提条件となります。

本研究会では、帰村時期や可住地の選定等の検討にあたって、融雪前にできる安全確認の第一歩の取り組みとして、既往資料をもとに今後の土砂災害の危険性について検討し、危険度別にエリア分けを行いました。また、今後の本格的な安全確認の方法として、融雪期以降の現地調査とともに専門家等で検討する「中越地域安全判定委員会（仮称）」設置の必要性もあわせて提案しているところです。

2. 資料について

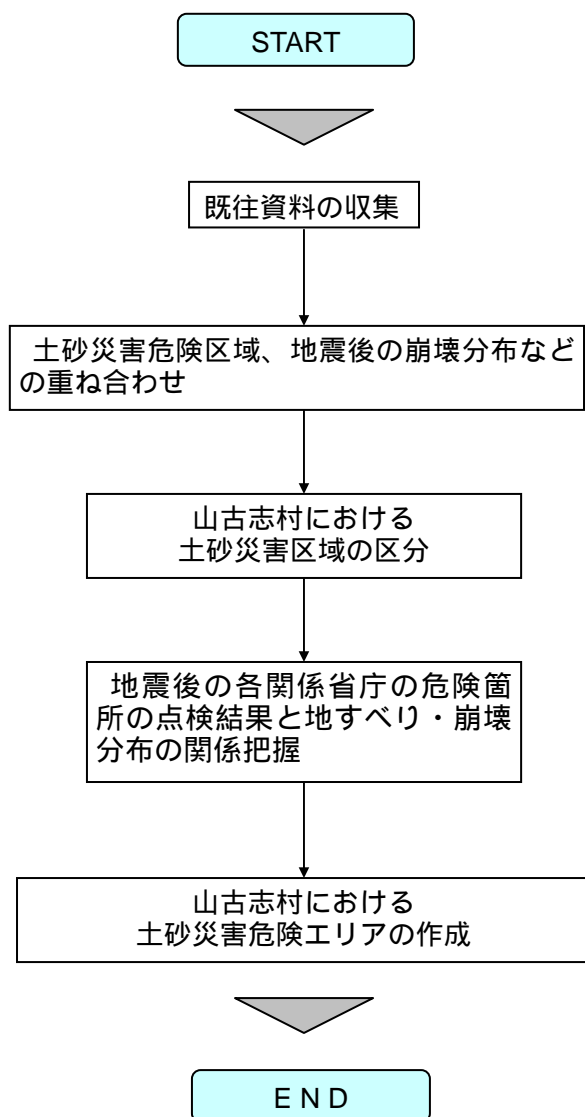
資料は、各関係省庁が所管する土砂災害危険箇所の既往調査資料および「新潟県中越地震」の後に各関係機関で実施された点検調査結果をもとに、山古志村域における今後の土砂災害の危険性について検討し、危険度別にエリア分けを行ったものであり、今冬に起こった新たな土砂災害のデータを含めて検討したものではありません。従って、詳細な危険度評価については、融雪後の現地調査が必要であり、各機関の調査結果の公表を待つこととなります。

3. 検討にあたって

土砂災害危険エリアの検討にあたっては、新潟大学積雪地域災害研究センター教授丸井英明氏に監修いただき、本研究会の責任において作成しました。

4. 検討フロー

検討フローを以下に示します。



資料5 . 地域資源・復興メモリアルコース検討

復旧・復興ビジョン策定にあたり、中山間地における地震の教訓を後世に伝えることを目的とした「中越地震コアエリア(防災学習エリア)」を設定し、周辺地の観光資源とともに利活用すべく復興メモリアルコースを検討している。ここで提示している資料は、山古志村及び周辺地域の防災学習現場候補地、既存観光資源・イベント等について収集・整理し、取りまとめたものである。

目次

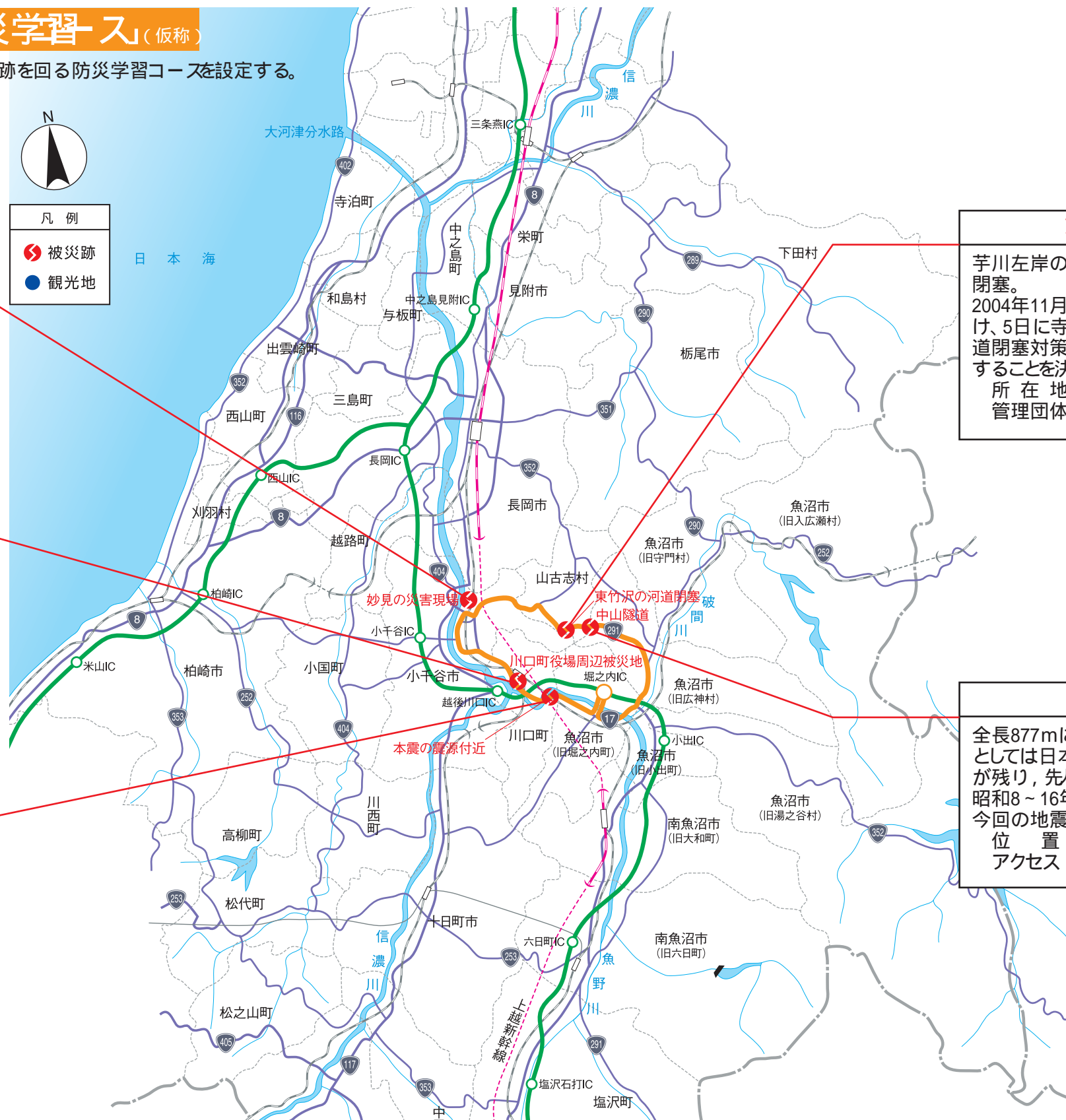
1 . 地域資源・復興メモリアルコース

- ・コアコース：「中越地震を振り返る防災学習コース（仮称）」
- ・オプションコース：「中越・魚沼の自然を巡るコース（仮称）」
- ・オプションコース：「戊辰戦争・河井継之助ゆかりを巡るコース（仮称）」

復興メモリアルコース

コアコース「中越地震を振り返る防災学習コース」(仮称)

中越地震の被災経験を全国・次代へと継ぐために、震源地周辺の被災跡を回る防災学習コースを設定する。



妙見の災害現場

長岡市妙見町の一般県道589号において岩盤崩落が発生。2005年2月15日時点でも全面通行止となっている。
また、車ごと生き埋めになっていた母子3人のうち男児1人が救出されたことでも注目を集めた。
所在地:長岡市妙見町
管理団体:新潟県

川口町役場周辺被災地

越後川口ICから川口町役場の間は通行が至る所で規制され、道路の亀裂、陥没が頻繁に見られた。JR越後川口駅東側は斜面が隣接し、斜面崩壊が多数確認された。
川口駅前中心部は、JR越後川口駅から信濃川に向かい繁華街となっており、その周辺は軒並み全壊あるいは半壊した家屋や商店が確認された。
所在地:川口町川口
管理団体:川口町

本震の震源付近(川口町和南津地区)

和南津地区は「激震ゾーン」に含まれており、多くに木造建造物が大破や倒壊などの大きな被害を受けた。
また、和南津トンネルでは覆工コンクリート剥離等の損傷が発生し、通行止めが続いた。11/2に片側交互通行で開通、12/26に片側交互通行規制解除。2車線で通行可能となった。さらに、上越新幹線と南津橋梁付近の高架脚部も損傷を受けた。
所在地:川口町和南津
管理団体:国・JR・川口町等
現在の復旧状況:予定:
トンネルと橋脚は復旧済み

東竹沢地区の河道閉塞

芋川左岸の大規模な地すべり性崩壊で河道が閉塞。
2004年11月2日、新潟県知事からの要請を受け、5日に寺野地区・東竹沢地区の2箇所の河道閉塞対策について直轄砂防事業として実施することを決定した。
所在地:山古志村寺野
管理団体:新潟県 国

中山隧道

全長877mに及び、人の通行する手堀の隧道としては日本一といわれ、今でもソリハシの跡が残り、先人達の偉大な功労が伝わってくる。昭和8~16年(9年間)開通昭和16年。今回の地震にあっても被害はなかった。
位置:山古志村大字東竹沢字小松倉
アクセス:小千谷ICから車で35分

約50km <移動時間>約1時間20分

堀之内IC	国道17号 8km 10分	本震の震源付近	国道17号 3km 4分	川口町役場周辺被災地	国道17号 9km 15分	妙見の災害現場	国道291号 12km 19分
東竹沢の河道閉塞	国道291号 3km 5分	中山隧道	国道291、252号 16km 22分	堀之内IC			

時間は平成11年度道路交通センサス平日旅行速度を基に概算

復興メモリアルコース

オプションコース：「中越・魚沼の自然を巡るス」(仮称)

コアコースの見学場所を基本とし、周辺地域魅力ある観光施設と組み合わせたモデルコースを設定し、被災地域の復興へつなげる。例えば、「秋の味覚」「自然験」キッズ学習など対象者別、季節別のテーマによってオプションコースを設定する。

錦鯉の里

錦鯉会館と錦鯉公園からなり、正面の門は武家屋敷のたたずまいを思わせる。八角形の観賞棟では、優美な錦鯉約100匹が遊泳。会館の周囲は静かな日本庭園。品評会に限らず、泳ぐ宝石 錦鯉の美しい姿をいつでも間近に鑑賞できる。大小の滝や、橋などを配置した池の中に錦鯉が泳いでいる公園と、錦鯉の歴史や品種 飼育方法など錦鯉に関する各種資料の展示ホール、そして特に逸品を集めた鑑賞池がある。鑑賞池では入場者が錦鯉にえさを与えることもできる。

位置 小千谷市城内1-8-22
アクセス 小千谷駅からバスで10分

小千谷市総合産業会館サンプラザ

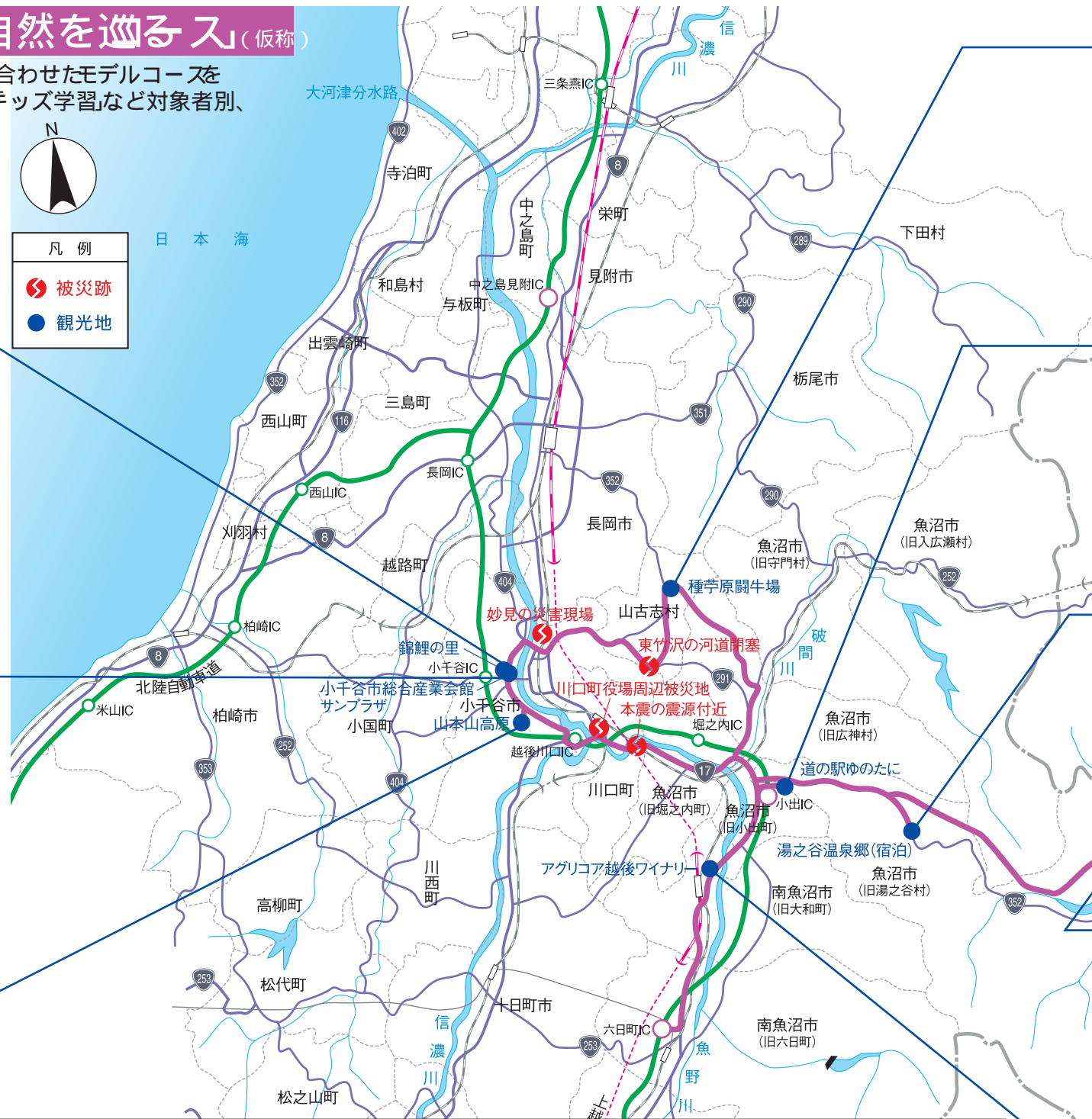
小千谷市の観光・産業 物産が一目でわかる総合産業会館「サンプラザ」。世界一の四尺玉の模型の展示や、産業の紹介、数百年の伝統を誇る小千谷縮 紬などの展示 販売、そのほかに特産品である日本酒、米菓、小千谷そばなど、お土産品の販売もされている。サンプラザ内の「小千谷織物工房」には、来館者が実際に織物を体験できる体験工房や実演コーナーがある。

位置 小千谷市城内1-8-25
アクセス 小千谷駅からバスで5分

山本山高原

標高336メートルの山本山高原。越後の名山や、信濃川を見晴らす360°大パノラマの絶景が得られ、ドライブやハイキングに最適。山頂周辺一帯は牧場があり、展望休憩場となっている。無料。

位置 小千谷市山本
アクセス 小千谷駅から車で30分



種芋原闘牛場

この地域の闘牛は沖縄や宇和島等の闘牛とは異なり、古式をそのまま伝承しているものである。村内に3箇所の闘牛場があり、5月以降、11月まで会場を変えて、月に1~2回ずつ開催される。種芋原闘牛場では、種芋原まつりと併せて開催される。
位置 山古志村種芋原
アクセス 上越線長岡駅または小千谷駅下車、車で20分

道の駅ゆのたに

駅の特産品販売所「深雪の里」では、魚沼産コシヒカリ、自然薯(12~2月)、山菜加工品などの特産品をはじめ、地域の産品を数多く揃えている。自然薯料理やそばはレストランで味わうこともできる。
位置 魚沼市吉田1144
アクセス 関越自動車道小出ICから国道291号と小出 守門線経由車で4分

湯之谷温泉郷(大湯温泉)

四季鮮やかな湯之谷は情緒あふれる温泉の里で、開湯800年の歴史をもつ。清流佐梨川にそって個性豊かな温泉宿が点在している。
位置 魚沼市大湯温泉ほか
アクセス 関越自動車道 小出ICより国道352号経由で 約20分。上越新幹線浦佐駅より車で約30分

奥只見湖

銀山平伝説と史実。奥只見湖は元禄の頃、銀の採掘で栄えた都と尾瀬三郎伝説が湖底に眠る、貯水量日本一の神秘的な湖。周辺には今もその影が偲ばれる数々の史跡が点在している。
位置 新潟県北魚沼郡
アクセス 関越自動車道小出ICから国道352号を經由。奥只見方面へ車で33km

アグリコ越後ワイナリー

八海山の麓、豪雪の地魚沼で栽培したぶどうによってできる香り立つ清潔なワイン。フランスのアルザス地方を模した外観の建物で、ワインと地元の食材を使った料理を食べられる。「雪氷室」でワインを貯蔵しており、それを見学することもできる。
位置 南魚沼市大和町
アクセス 浦佐駅からバスで5分

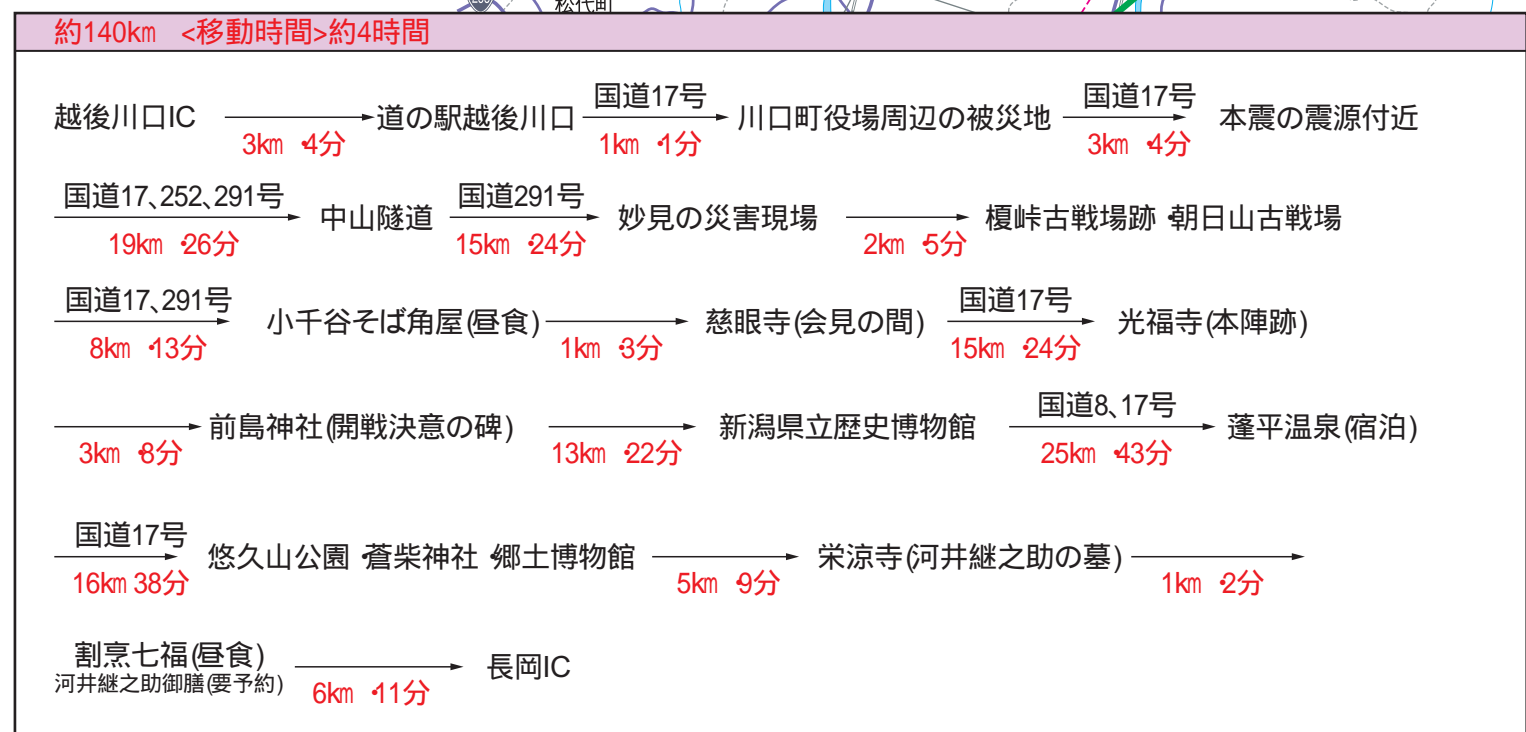
約160km <移動時間>約4時間20分				
小出IC	→ 国道17号 → 道の駅ゆのたに	→ 国道17号 → 本震の震源付近	→ 国道17号 → 川口町役場周辺の被災地	→ 11km 20分
	2km 4分	11km 17分	3km 4分	
山本山高原	→ 5km 9分 → 錦鯉の里	→ 0km 0分 → 小千谷市総合産業会館サンプラザ(昼食)	→ 国道17号 → 5km 8分	
妙見の災害現場	→ 国道291号 → 12km 19分 → 東竹沢の河道閉塞	→ 12km 20分 → 種芋原闘牛場	→ 国道352、252号 → 28km 41分	
湯之谷温泉郷(宿泊)	→ 国道352号、シルバーライン → 20km 34分 → 奥只見湖	→ シルバーライン、国道352、17号 → 36km 61分 → アグリコ越後ワイナリー(昼食)		
国道17号	→ 14km 22分 → 六日町IC			

復興メモリアルコース

オプションコース : 戊辰戦争 河井継之助ゆかりを巡るコース」(仮称)

- 割烹七福**
 長岡藩家老・河井継之助の好物を集めた「河井継之助御膳」を食すことができる。継之助が好んだ混ぜご飯「桜飯」をはじめ、地場産食材をふんだんに使ったお昼限定のメニューもある。
 位置:長岡市城内町
 アクセス:長岡駅そば
- 新潟県立歴史博物館**
 新潟県の歴史・文化を紹介する県立の歴史博物館。「雪とくらゐ米づくり」縄文人の世界」等もジオラマで展示されている。
 公開 9:30~17:00、休業:月、料金:小中学生100円、高校・大学生200円、大人400円
 位置:長岡市関原町1丁目字権現堂
 アクセス:長岡駅からバスで10分
- 前島神社**
 小千谷会談の決裂後、この地で長岡戊辰戦争開戦を決意したと言われており、開戦決意の碑がある。
 位置:長岡市前島町
- 小千谷そば角屋**
 角屋は代々そば作りの生業を継ぎ、「引き立て、打ち立て、ゆで立て」の味と技を今に伝えている。
 位置:小千谷市桜町
 アクセス:小千谷駅からバスで5分、小千谷ICより車で1分
- 慈眼寺**
 戊辰戦争を回避するため、官軍と地元長岡藩(家老:河井継之助)の談判した「会見の間」がある。
 位置:小千谷市平成
 アクセス:小千谷駅からバスで10分

榎峠古戦場跡 朝日山古戦場
 榎峠は、長岡戊辰戦争開戦直後に、激戦地となった。東を山脈、西を信濃川で守られている長岡にとって、南方にある榎峠は長岡藩攻防のための要所であった。開戦時、榎峠は西軍が占領していたが、東軍が朝日山や鬼倉山を奪回後、榎峠の西軍を背後から攻める形でここを奪回した。
 朝日山は、榎峠と同様に長岡藩攻防の要所であるため、開戦初期に激戦地となった。現在の朝日山には、石碑などがあり、戊辰戦争を今に伝えている。
 位置:(榎峠古戦場)長岡市妙見町、(朝日山古戦場)小千谷市浦柄
 アクセス:(朝日山古戦場)小千谷駅からバスで7分 徒歩で30分



栄涼寺
 長岡藩主であった牧野忠毅、忠篤、忠訓の墓、河井継之助の墓、三島億二郎の墓などがある。
 創建年代:1615、料金:無料、拝観時間:終日
 位置:長岡市東神田
 アクセス:長岡駅からバスで10分

悠久山公園 蒼柴神社 郷土博物館
 (悠久山公園 蒼柴神社)
 悠久山の山頂付近に河井継之助の頌徳碑 故長岡藩総督・河井君碑が建てられている。蒼柴神社には、北越戊辰戦争と西南の役の旧長岡藩士犠牲者を祭祀している。北越戊辰戦争では、軍事総督河井継之助、大隊長・山本帯刀をはじめ、300余名の藩士が戦死。西南の役では、徴募に応じ、殉じた一等少警部・池田九十郎ら18名が慰霊されている。
 位置:長岡市悠久町、
 アクセス:長岡駅からバスで15分
 (長岡市郷土史料館)
 長岡藩時代の遺品、河井継之助の遺品などが数多く展示されている。
 位置:長岡市柳原町2-1
 アクセス:長岡駅から徒歩で15分

光福寺
 小千谷の慈眼寺での和平会談決裂後、前島村で開戦を決意した河井継之助は、長岡藩の諸隊長を長岡藩本陣であるこの地に集め、新政府軍に対し、開戦の決意を演説した。
 位置:長岡市撰田屋
 アクセス:長岡駅東口からバスで20分

蓬平温泉
 長岡市の南東の端、県立東山自然公園の一角にあたり、大峰山と猿倉岳に挟まれた小さな盆地にある素朴な温泉地。宿は3軒だが、湯治を兼ねた温泉宿として知られる。
 位置:長岡市蓬平町
 アクセス:長岡駅からバスで40分

道の駅 越後川口
 信濃川と魚野川の織りなす代表的な河岸段丘に拓かれた川口町の中央に位置。交流物産館では、河岸段丘特有の川霧に育つ魚沼コンヒカリ 甘さがひと味違う農産物(スイカ・メロン)や山菜、朝もぎ(収穫)の新鮮で安心安全な農産物を販売。町内の達人が製作した手工芸品や農産加工物も販売し、その作り方や町内での体験場所を紹介してくれる。
 位置:川口町中山
 アクセス:長岡市より国道17号を東京方面に約30分